2012年12月20日
スポーツ報知　7面

スポーツ報知　2012年(平成24年)12月20日(木曜日)　(第三種郵便物認可)

日本男子4人目表彰台「五輪もメダル射程」

湯浅 今回

回転 2回計1分44秒78

W杯アルペン

18日、男子回転第3戦を行い、湯浅直樹(29)＝スポーツアルペンク＝(イタリア・マドンナディカンピリオ＝共同)が2回の合計1分44秒78で3位に入り、W杯で自身初の表彰台に立った。これまでの最高位は昨季2度あった5位。男子の日本勢の表彰台は2006年3月に回転で佐々木明(ICI石井スポーツ)が2位となって以来で、男女を通じて5人目。14年2月のソチ五輪に向けて弾みをつけた。マルセル・ヒルシャー(オーストリア)が合計1分42秒50で今季2勝目となる通算14勝目を挙げた。

W杯回転で3位に入った湯浅(ロイター=共同)

◆湯浅　W杯アルペンで表彰台に上がった日本男子は岡部哲也、木村公宣、佐々木に続き4人目。女子は93年に川端絵美が3位に入っており、男女を通じ5人目の快挙となった。

駆け抜けて転倒動けず

旗門ぎりぎりを攻め、湯浅が硬くしまった急斜面を一気に滑り降りてきた。「ラストの6旗門から何も覚えていない」。コースアウトしそうなスピードで前のめりにゴールすると、そのまま転倒し、動けなくなった。研ぎ澄ました集中力で腰痛を抑え込み、快挙を成し遂げた。

2011年の世界選手権は6位で、昨季はW杯で5位が2度。こつこつと着実に力を蓄えてきた29歳のレーサーは通算83度目のW杯で初の表彰台を「この結果は奇跡ではなく、積み重ねの一つ」と胸を張った。1回目26位で、5番目にスタートした2回目は「練習の滑りがうまく出た」。結果的に2位のタイムで残り2人まで電光掲示板の一番上に名前が残った。

積み重ね 通算83戦目

開幕直前に出た腰痛が再発、大会前日も自力で歩くことがままならなかった。それでも「滑っている間は痛くない。集中力が極限の状態なので」という。1回目の後はスタッフ2人に抱えられないと動けなかったが、約2時間半後の2回目に驚異的な滑りを披露。スキー板をつえにして表彰台に上った湯浅を、日本のクリスチャン・ライトナー・チーフコーチは「こんなタフな選手は世界中にいない」と称賛。片桐幹雄アルペン部長は「コンスタントに上位に来れば、五輪もメダルが射程圏に入る」と笑顔を見せた。

「好成績が出るほど、自分の滑りに自信がつくし、動きも良くなる。この勢いで上がっていきたい」と湯浅。五輪では56年大会に猪谷千春が初の銀を獲得したのが唯一の日本人メダリストと、世界から実力が離されているアルペン。ソチ五輪代表選考は決まっていないが、前回のバンクーバー五輪代表を逃した湯浅だけに、大きな弾みとなるメダルだった。

いつもいける予感。裏切られるけど……

湯浅に聞く

―ようやく表彰台。

「世界選手権の6位、W杯の5位が2度あっての3位だから、誰も僕の力を疑わないと思う」

―2回目の快走。

「もともと調子は悪くなかった。いかに練習のときのパフォーマンスをレースで出すかが課題だった。2回目はいつもの僕らしい滑りができた。いける予感はいつもしている。だいたい裏切られるけど、今回は違った」

―2回とも滑った後は腰痛で動けなかった。

「滑っている間は痛くない。ゴールして一度止まってから動きだそうとすると、信じられないぐらいの激痛が走る」

―暫定1位の間はドキドキしたか。

「それより痛みで震えが止まらなかった。初めての表彰台って、こんな形でできてしまうのかと思った」

佐々木得意も悔し途中棄権

○…佐々木の今季2度目のW杯は、1回目途中棄権で終わった。今大会は得意な急斜面が続くコースだっただけに、悔しそうに天を仰いだ。攻める気持ちが前に出すぎたのか、序盤から何度もバランスを崩した。その度に粘って持ち直していたが、終盤の旗門に当たって前に吹っ飛び、レースを終えた。

◆アルペンスキー・回転　スラロームとも呼ばれる。男子のコースはスタートからフィニッシュまで180～220㍍。赤と青の2本の旗門が52～78本、コース間に設置され、対になった同色の旗門間を2回滑り合計時間で順位を決定。素早く正確なターン技術が求められ、最高速度は150㌔にもなる。標高差約1000㍍を一気に滑る「滑降」や、回転と滑降の2種目の要素を入れた「スーパー大回転」などの種目もある。

◆湯浅　直樹(ゆあさ・なおき)　1983年4月24日、札幌市生まれ。29歳。北海学園札幌高から北海道東海大に進学。スポーツアルペンク所属。アルペン男子回転で06年トリノ五輪7位。10年バンクーバー五輪は出場を逃した。11年世界選手権6位。W杯ではこれまで昨季2戦連続で記録した5位が最高だった。177㌢、72㌔。